

# 真偽の勘決

——『教行信証』の諸問題（二七）——

金子大榮

—

今日は最後の講義ですが、題目は「真偽の勘決」です。

「化身土文類」の「末卷」のことを話すのですが、その「末卷」のはじめに「それ、もろもろの修多羅に拠つて真偽を勘決して、外教邪偽の異執を教誡」（『聖典』三六八頁）するところから始まっております。經典によつて、真なるものと偽りなるものとを明らかにして、そして外教、仏教以外の外教邪偽の異執を教誡するという、かなり厳しいことばが用いてあります。その勘決真偽ということばをそのまま題にいたしまして、今日は真偽と勘決ということばをしたいと思います。

そこで、言わねばならないことは二、三あるのですが、まず第一に真と偽とを勘決することであるが、そもそも、いわゆる外道というものと仏教というものとはどういふ点において違ふのであるか。その勘決の原理となるべきものはなんであるかということから一つ決めていかなければならない。それには前の「真仏土卷」に『大涅槃經』

を引いてこういうことが言うてあります。「外の解脱は名づけて無常とす、内の解脱はこれを名づけて常とすと。善男子、道と菩提および涅槃と、ことごとく名づけて常とす」〔聖典〕三〇五頁)。そこで、無常なるものと、変わらないものとを挙げて、外の解脱、われわれが苦しみを逃れるということは、外のはたらきによるのである。境、状態まがひがよくなるならば、環境のあり方が変わってくれば、われわれが救われるのであると、外部の事情によって解脱する、すなわち苦勞が抜けるのであるというふう<sup>に</sup>に考えておるが、それは当てにならないものである。その当てにならない解脱を説くのが、それが外教、あるいは外道というものである。

それに対して内なる解脱。仏教の解脱。仏教はことに内道、内なる道、内道と言っているのでありますが、内道の解脱は、これは内から苦しみを取り、悩みを去るところの方法を、内から明らかにしていこうというのであるから、それが変わらないものである。だから仏道というものと、それから仏道によって得られる涅槃というものが皆常なのである。

言い換えれば、涅槃を求むる。内なる自覚によつて涅槃を求むるものが、それが仏教であり、外教というものは、涅槃を求めているのでありましょうけれども、それは外からの、外から何か事情が改まればというふう<sup>に</sup>に考えておるのが、それが外教というものであると、こう言っております。

ですから、仏法と外道とどう違いますかといえ、仏教は、内、自らの自覚によつて眞実の涅槃を得るものが仏教であり、外の事情によつてすべてを超えていこうということは、本当に涅槃の境地に達することはできないからして、それを外道というのであると。こう言つて良いわけでありませう。

そこで、この「得ざれ」「得ざれ」といふことばですね。仏道に事うるものは「天を拝することを得ざれ」「余道に事うることを得ざれ」〔聖典〕三三八頁)、得ざれといふことばが、それが言い換えれば、そういうような道を外に求めるといふことが、あつてはならない。それでは仏法といふものでないといふことになるわけでありませう。

そこで先日ちよつと書いておきましたことですが、『歎異抄』の第七章に「念仏者は、無碍の一道なり」（『聖典』六二九頁）ということばがある。そうしてそこに、「天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし」（『聖典』六二九頁）ということがありますが、あのことを見ると、ちょうど「現世利益和讃」を思い出す。『歎異抄』の第七章では現世利益となっておりするが、「化身土文類」に出てきますこともですね、諸天善神が念仏者を護り、そして外道もそれをさまたぐることはできないということが書いてあるのですから、その点に着眼しますというと、「化身土卷」の「末卷」はあたかも現世利益を違った方面から書いてあるもののように思われる。しかしその現世利益というものと、現生の利益というものと、同じのであるか、違うのであるか。

現生十種の益というものがある。その現生十種の益の中に、一番はじめに冥衆護持の益というものがある。その冥衆護持の益というものを広げたものが、現世利益であると見ることができすから、結局同じことになるのであろうというふうにも思われるのでもありますが、しかし、何か『歎異抄』の方を見ますというと、「天神地祇も敬伏し」ということばがあります。あの「敬伏」の二字はかなり強いことばでありまして、天神地祇もお護りになるということだけでなく、天神地祇の方が敬伏すると、こう言うてあるところに何かがあるに違いない。そこで、現生の益というのは念仏の利益であり、現世の利益というのは念仏者の利益であると。こういうふうに言っているのであらう。

ということばはしばしば申しますように、第七章に「念仏者は」というてあります。あそこで念仏者はというてあることばにつきまして、「者」ということばは使つてあるけれども、あの者は「は」とも読むのであつて、だから古い書物には者という字を書き消して、「は」の字が入れてある。この者は「は」と読むべきものであるということ、本当は者の字は要らないのである。要らないのであるけれども、者の字を書いて伝えられたので、たまたま『歎異抄』の第七章ではその字が残つたのであつて、同じ『歎異抄』でもほかのところには「者」の字を消して「は」の字にしてあるところも多いと言つてあります。

そういうことはそうなんだろう。私も知らないことですから、その道の研究者から言えばそうなんだろう。またそうでなくとも、「者」ということはの上にも重点を置かないで、念仏というものはというくらいに読んで然るべきである、こう先輩の人びとからも言われたのであります。

けど私には何か妙な固執がありまして、あそこには「念仏者は」でないと、どうもしっくりこない。そこで、念仏の利益として天神地祇も敬伏するというようなことは、大体おかしいことでないでしょうか。「念仏者」、念仏する者に対してならば、天神地祇も敬伏するとか、魔界外道も障碍しないということは言えるのですけれども、「念仏は」では、あの『歎異抄』の箇條がしっくりしないように思うのであります。むしろ生死すなわち涅槃なりと証知せしむるのが念仏の利益である。

現生十種の益の方は諸仏護念の益、諸仏称讃の益、心光常護の益と、みな念仏の利益である。したがって、念仏の利益というものは念仏の内にそなわっている徳なのであるからして、念仏する者はその念仏の徳をいただいて、そして人生生活を豊かにすることができると念仏の利益は現生の益と現れて、人間生活は豊かになるのである。

しかし念仏者の利益はそうでなくて、本来の意味の独立である。その余の神や、あるいは仏も入れてもいいかもしれませんが、そういうものを当てにするのではない。念仏者というものは、念仏によつてそこに自分というものを見出すのであって、本来の意味において独立と言いましようか。何人にもたよらないという、本願をたのむと言うのだから、本願だけにたよっているようでありませけれども、そうでない。本願を信ずるといふことは、そこに自身の道を見出すということではなくてはならない。だからそういうふうに言いますというと、第七章というのは非常に重要な意味を持っている。何でも念仏者といえは仏をたのみ、何かの力を当てにするように考えますけど、そうでない。

信ずるといふことは自己の道を発見することなのであって、自己の道を発見することとは、言い換えれば本当の自分、自分が自分であることのできる道、それが現世の利益と言わなくてはならぬと。こう考えていいのであろう。

そういたしますと、『般舟三昧経』を引いて、仏法を学ぶものは仏に帰依し、法に帰依し、比丘僧に帰依して、そうして余道に事えてはならないというふうに引いてある意味がはつきり分かるわけであります（『聖典』三六八頁の意）。ですからして、真偽勘決の原理はそこにあるのであるということ、まず明らかにしておかなければならない。

## 二

次にしからばどんなことがこの「化身土文類」「末卷」に捉えてあるかという点、それは省察の自己と書いてみたのですが、どういうことをわれわれは観察し、真偽を勘決しようといわれる教えによってどういうことが考えられるかということになる。それが「化身土文類」「末卷」の全体であります。

その全体を見通しますと、おおよそ三つのことが説かれてあります。第一は自然の事実とでも申しましょうかね、このわれわれの置かれてあるところの天地自然の、現実の実際というものはかくの如きものであるということになります。

「天を拝することを得ざれ」（『聖典』三六八頁）、「吉良日を視ることを得ざれ」（『聖典』三六八頁の意）ということばを明らかにせられたものであると、こうも考えてみたことがありますし、まあでもそういうふうに表示したのでありますけれども、しかし「天を拝することを得ざれ」とか「吉良日を視ることを得ざれ」とかという、そのことばに相当するものが、本文には出ておらないのです。出ておるものは自然の事実、日月というものはこういうふうにしてきているものである。春夏秋冬というのはいってきているのであるという事実を挙げて、そして自ずからそういうことになっておるのであるから、天地自然というものはそういうふうになっておるのであるから、特にそれを拝むとか、あるいは日の良し悪しとかというものは考えるに及ばない。日の良し悪しもいずれでもいいのであるし、良い日もあれば、悪い日もあるようにできておるのであるから、と。こういうふうなことであります。

そこで考えられることは、それは『大集月藏経』、あるいは『大集日藏経』というようなものをもつぱら引用されておるのでありますが、そこにあるものはインド以来の東洋の自然科学的なものであると、こう言っているであろう。敢えて自然科学ということばを使ってみたのですが、今日でもどこかに残っておりませぬ。今日は何の日だったというようなことを言う。丑の日だとか、辰の日だとかというようなことを言う。こういう経典は、一つの古い古い科学書であったと考えることはできないであらうか。

この『教行信証』に『日藏経』や『月藏経』に説いてありますことを明らかにするために、古代の天文学と申しましょうか、そういう書物を手に入れて読んでみたことがあります、それと同じようなことがここに記されているのであります。一年を四季に分けて春夏秋冬としたことを説いている。あるいは十二月を説き、そしてこの月はこの神様がお護りになる。この日はこの神によって支配されているとも言いますか。そういうようなことが言っているのであります。

だから日の良し悪しというようなことは説いてありませんけれども、この日はこういう日であり、この月はこういう月であるというふうなことがずっと書き上げているというところ、そこに昔の人の知識によって見られた、今日の自然科学と同じようなものにならうかと思うのであります。

ですから、そこに迷信と無知という問題を考えていいと思うのであります。今日は、その古い見方、『日藏経』や『月藏経』に説かれてあること、あるいはもつと明瞭に言えば、太陽暦が中心になってきた時代におきましては、太陽暦、月を中心とした暦は、大体、無知であると言っているのではないかね。

しかし太陽暦を用いたからといって、それは迷信だということとは言えないのでしよう。だから迷信というものと、無知というものとは一応も二応も区別しなければならぬのではないかと思います。迷信というよりは、信ずるよりは「心」というのが本当ではないかと言った方もあります。まあそうでしょうか。心の迷い、その迷心といわれるもの

と、それから無知といわれるものとは決して一つではない。今日では無知も迷心も同じものにしてありますけれども、それは少し失礼なことでないであろうか。ということは、科学的知識というものは絶えず進歩しております。

私は何十年前前に、京大のある学生さん、数学を研究している人がどういうゆかりであったかは知らないが、私を訪ねて、そしていろいろと研究のたよりになることをお聞きになりました。そのときに彼はこういうことを言ったのです。私たちの習っておる数学はもう十五年前のものであって、その十五年以後、今日の数学はうんと進んでおります。そして私たちはまだ知りませんと言いました。数学なんというものはもう、決まって動かないものと思っておりますときにその話を聞いて、ずいぶん驚いたことがあるのであります。今日ではそんなことに驚くということにはよっぽど野暮なんでしょうね。

この間、アメリカへ行つてアメリカの学校で数学の教師をして、久しぶりに日本に帰ってきた若い人の話が出ておりましたよね。本当に日に日に研究が進むと言うのですから、そうしますとああいう知識というものはもう、そう進むということは考えられないものであるけれども、そう進むそうであります。況んや、自然科学の知識ですね。私たちは実際に分かっているのはニュートン以前のものでありまして、新物理学などはことばだけは知っておりますけれども、実際、どうなっておるのか分からない。

だから今日、それが間違いないことだと思つても、しばらく後になるとそれがまた取り消されるかも知れない。だから皮肉を言うとか科学的知識ほど当てにならないものはないと言つた人があります。まさかそれも言えないのでしょうか、そういうふうな点から言えば無知である。私たちがみな無知である。しかし無知であるということは決して迷心であるということとは言えない。

それは古い、この太陰暦、月を中心とする暦のようなもの信じる人は迷心だと言いますけれども、それは少々無理でないであろうか。だからこの世の中から迷心をなくしようということ、無知をなくしようということとは違う。

迷心をなくするということは、宗教家の仕事であるにしても、無知をなくすることは科学者の仕事でなくてはならない。無知であることまで宗教家の責任にして考えて、そして無知と迷心とを混乱にするということはどういうものかなあと思います。

それは真面目な真信者でありながらどうかと思う、まあ一口に言うて見れば迷心だと思われるようなことをやっておられる人があれば、それを私はすぐ咎めることは無理だと思っております。どんな科学的知識のないものでも、今日は丑の日だ、今日は辰の日だと言うてる人だつて、本当に念仏信者であり得ないという理屈はないのであります。ただ、丑の日だ、辰の日だということによって、そしていろいろの気がかりをする。それに支配されて、いろいろの生活上の迷いを生ずるに初めて迷心と言われるのであつて、そういうふうな迷心は知識人といえども免れない。だから、逆に申しますれば、何と言いましようか、学識経験者と言われてる人であるからといってね、そういう人は確かに無知ではないでしょうけれども、しかしそういう人だつて迷心がないとは決して言えない。心に迷い、行に迷うというようなことは、そういう人にもあり得ることなのであります。

だからして、無知なるものは必ずしも迷心ではなく、知識人は必ずしも有心ではないということを明らかにしていかなければならない。そういうことを思うのであります。そして親鸞聖人は素直に古い暦のことを『日藏経』や『月藏経』によって述べて、こういうことになっておるのだと。こういうことになっておるのだからして、ただそれに随順していく、それが本当なのであつて、それに対していろいろのご祈禱などをするのは無用のことであるということのようであります。

### 三

第二に、「末巻」において見られることは、その迷心のわざわいです。その日の良し悪しによって、良いことがあ



るとか、悪いことがあるとかということによって行動し、あるいはお祈りなどをする。そこに迷心というものがある。その迷心のわざわいというものを、かなり強く説いてあります。

それは一言に申しますれば、その鬼神に事うるものは却って鬼神にとらえられるということであります。

この神様を信じるぞとか、この魔除けをするとかということを使うことが、結局悪魔にしばらくはまいて、また鬼神に支配されることになるのであるということで、一々ことを挙げませんが、迷心における禍害というものをかなり強く説いてあります。

ここで言い残していましたが、宗祖が比叡山から出られたということは、あるいはこの迷心的なもの、仏法に帰依しておる人も、「内心外道を帰敬せり」〔正像末和讃〕『聖典』五〇九頁〕ということを見るにたえかねられたことがあったのでないであろうか。内に自らを省みて、聖道の修行ができがたいということもあったのでありましょうけれども、外ほかに教界のありさまを見て、なんで仏教だと言っておきながら比叡山は仏教の道場であると言いながら、事實は祈願しておるよりほか何もないではないかと、これでは仏教とは言えないということで、おるにたえないということもあったのでないであろうか。

自分は聖道の修行はできないということはこの比叡山で勉強する資格がないと、自分のようなものはここで修行する資格がないと、そういうこともありましようけれども、またそれだけではなくて、実際の状態を見るとたえられない。こういうところにおることはたえられないという感情もあつたに違いない。それで、なかれ、なかれ、得えざれ、得えざれというようなことも、そこから出てきたに違いないと思います。

したがって、祈願祈祷で果てておる教界の状況を見ては、それが人間に幸福を与えるどころか、却ってわざわいしか与えておらないという実際を見て、そしてあの「化身土文類」は書かれたのであるといえると思うのであります。現在の教団でも似たようなことは考えることができましよう。資格がない。顧みて資格がないということと、同時に

目を開いてみて、これはたまらないということがあったに違いない。

だから、この『教行信証』をずっと見ますと、いま申しましたように、いわゆる自然科学的な事実を挙げて、はじめの方には『日藏経』『月藏経』によって、そして春はこの神様、夏はこの神様、そういうようなことが説いてあるようなことがいかにも平和であります、それが進むという、これが祈願祈祷によって、与えられるところのわざわいを強く説いてあることが目に立つのであります。

#### 四

それから最後へ行きますという、今度純粹に外道の批判が出てくる。「余道に事うることを得ざれ」ということを言うてあります。この「余道に事うることを得ざれ」ということは、いわゆる全体的に言うたのであって、天を拝することはできない、鬼神を拝することはできない、吉良日を視ることはできないという三つがその内容であると、こう久しく考えてきましたし、そういうふうに表示もしたことがあります。

それは別にまとめるといふわけではありませんけれども、しかし「余道に事うることを得ざれ」と言うてあることばがですね。またそのことばとして独立して意味を持っている。そうすれば余道に事うるを得ざれということと、それから「天を拝することを得ざれ」という三つに加えて、四つの得ざれがあるのだと見た方が『教行信証』に親しいかもしれないのであります。

そして、そうしますというと、終わりの方に行きますともつばら外道の批判が出てきます。その外道の批判は主として『弁正論』。『弁正論』というものであります、この『弁正論』というものは何か非常に読みにくいものであります。

京大におられる武内義範の親が、仙台におられまして、非常に篤学の人で、『弁正論』についても特別の研究をせ

られたものが、『大谷学報』の前身、『無尽灯』か何かに発表せられたことがあります（『教行信証』所引『辯正論』に就きて）『大谷学報』第二卷第一号、一九三二年）。私は、あの『講読』を書きましたときには、それを読んで大いに啓発されて、こう読むべきであるということ、読みやすいようにすることができた。なのであの『講読』の方でも、その指導によって書きました。何か古い本というものは、何かいるんなことで読みにくくなっておるものでありますが、その論文は「それはそうであつたか」と分かるようになっております。

それをこう見ますと、もっぱら道教の批判。道教、老子。老子の教えそのものは一つの哲学なのでしようが、それが道教というものになつて、そうしてその道教というのが、いわば怪力乱神ということばがあります。妙なことを説いて、そして妙なことを言う。それは、この「末卷」をお読みになると、よく分かる。奇怪至極なことを言う、ただ人を惑わすようなことを言うということ、もっぱら道教が批判してあります。

しかし道教的な思想というのが日本人に相当に食い入つておるのであると言つていいのでないかと思ひます。外道の思想であると、こう申しましたが日本人に相当に食い入つておるとか、あるいは魔がさまたげるとかというふうなものだけでなしに、ことに仏教というものに対して、道教の教えは、釈迦と老子と比較して、そして釈迦よりは老子の方が偉いのだというようなことが説いてあつて、ずいぶん奇怪至極なことが言われてある。それは批判されて当然なことなんです、ただ陰で儒教をも、孔子の教えをも外道として、兼ねて批判してある。

これは孔子の教えというものはきわめて現実的なものであつて、私たちも青年時代には儒教の書物にはずいぶん教えられたものであります。近頃、陽明学というものが復活しておりますが、陽明学というのが非常にいいものであります、私もずいぶん陽明学の書物に教えられたことがあります。

日本で申しますというと、中江藤樹、それから熊沢蕃山、大塩平八郎、そういうような人びとがおります、それらの書物はわれわれの修養のためにはたいへんに良い本であります。何かそれはそれとして、私たちの教養として考

えていかなければならないのですが、宗祖の場合におきましては、老子の教えとひっくりかえり、また兼ねて孔子の教えも批判しておられるようであります。

その批判は、それらが目の前のことだけを問題としておって、そして本当に永遠のまなことを持たないのだということになるように思われます。

昔、南條文雄という先生がおりました、笑い話と云うては先生、怒られるか分からないけど、ただ聞いた私たちは笑い話としてよく聞いたものですが、ある儒者が釈迦と孔子と相撲を取った絵を描いて、その中で釈迦が負けて倒れていて孔子が手を挙げています。相撲を取らせれば釈迦の方が負けだという絵を描いた。そして仏教者の所へ持ってきて、これに讀をせよと言った。そしたら仏教の坊さん、偉い坊さんでさっそく筆を取って、「孔子三世を知らず、釈迦絶倒してこれを笑う」と書いた。なかなかおもしろいね。

孔子は偉そうなことを言うけれども、この世のことしか知らないで三世のことを知らない。お釈迦さまはおかしくてたまらないから、ひっくり返って笑っておるのだという。「孔子三世を知らず、釈迦絶倒してこれを笑う」と。南條先生からその話を聞くと、いつも笑ったものでありまするが、何かさういうこと、笑い話でありますけれども、『教行信証』を讀んでみると、このようなものを感じられるのであります。

つまり、祖師の批評の中にも、ただ目の前のことだけしか考えない、現実、現実と云って、現実の人生の中のことしか考えておらないということが批判されてある。それで本当のことを分るのであろうか。だから、たとえば親しいものと憎いものとを問題にして、彼は親しく、彼は疎いという場合、ことに孔子の教えは、親より疎に及べということです。身内の親しいものから、その感じをすべてに及ぼさなければならぬというのは儒教の教えです。

けれども、「識体、六趣に輪廻す」(『聖典』三九二頁)というように、われわれというものは輪廻するのであるから、あるときは敵となり、あるときは味方となり、あるときは親しみ、あるときは仇となる。「たれか怨親を弁えん」

『聖典』三九二頁）その長い目で見れば、親しい、憎いということは、結局、いいかげんなことではないかというふうなことを言っておられる。

それを、先日は私が話した意味で解釈すれば、要するに世間の教えというものは、ただ現実人世、現実人世と言っておつて、もう少し長い目をもつて、もう少し永遠のまなこをもつて、ものを見るということを知らないとともに、そこにいわゆる外の解脱、周囲の事情さえ改まればというところへ解脱が捉えられて、本当に自覚の道というものを見いだせないのだということをおうとされるのもあろうか。

そういうようなことで、この「化身土文類」の「末巻」というのは案外にもいろいろなことを考えさせる一巻であると言つていいのでしょうか。

## 五

最後に一つ付け加えておきたいことは、「ささぐ」ということである。『教行信証』全体でもそうでありましようが、この書物はいったい誰にささげるものであるかということ。ささげるといふことばというのは、いまでもそういう本がまれにあるのでしようが、私ども青年時に読んだ本などによく「ささぐ」といふことば——「この書を亡き親にささぐ」とか、「この書を亡き妻にささぐ」とか——この「ささぐ」といふことばが巻を開いたところに書いてある。そうすれば『教行信証』というものが、もし親鸞聖人が誰にささぐというようなことをお書きになるとしますれば、誰なんだろうかな。

そんなことは、「敬白一切往生人」と言うてあるからして、別に誰ということはない。前なる者は後を導き、後なる者は前を訪つて、展転して窮まりなかれ。この書を見聞せんものは、信順を因とし、疑謗を縁とせよということであるからして、強いて言えば、これは仏にささげられたものであり、阿弥陀仏にささげられたものであり、同一の道

に帰した有縁の人びとにささげられたものであると。

だからささぐるということは、余計なことを金子式に考えたものだと言われればそれまでですが、ただそのささぐとことばが多くの書物にあるので、もし親鸞が『教行信証』をささげるといふことであるならば、「化身土巻」の「末巻」において考えられることができるかというところ、第一に分かることは聖徳太子にささぐとことばです。いったい、聖徳太子和讃を見ますというと、祖師は聖徳太子に深き敬意をもっておられたということが明らかであります。それにも関わらず『教行信証』のどこにも太子のことばを一言も引いていない。けれどあれだけ聖徳太子というのを忘れることができなかった宗祖であるから、『教行信証』に一言もないからといって、太子崇拜というのは別なものであると考えなければならぬのであろうか。そのようには思われない。

そうしますと「篤く三宝を敬え」(「十七条憲法」『聖典』九六三頁)と言って、そして自らの立場に立って、「篤く三宝を敬え」と言われた和国の教主が、この「末巻」のはじめに引かれていることば——「優婆夷、この三昧を聞きて学ばんと欲する者は」「仏に帰命せよ、法に帰命せよ、比丘僧に帰命せよ」(『聖典』三六八頁の意)——の背景にあるように思われる。その和国の教主の導きによって、『教行信証』というものもできたのであるというお気持ちがあるものとすれば、少なくとも、この「化身土文類」を通して、そして『教行信証』を読むときにこの書を、和国の教主、太子聖徳王にささぐとことばという感じがあるのでないであろうか。太子というものを、それほどまでに重要に見るということが、果たして適当であるかどうかということもおそらく問題であるかも知れません。

しかし今日、「十七条憲法」の他に三経の義疏というものがいろいろと研究されて、三経の義疏の中から、私たちにある感銘を与えることばを拾うてみますというと、ずいぶん真宗的なことば、念仏を信ずる者でなければ、領解ができないようなことばが多いのであります。だからこの『教行信証』を聖徳太子にささぐとことばでもあろう。

それを言い換えれば、日本国民にささぐでもいいのではないかな。十方衆生、アメリカの人にも、ドイツの人にも

読んで貰いたい、至る所に読んでほしいのであるけれども、しかしながら、日本国を愛するということがある。粟散片州という、実際、わが国のようなものを世界の大きさと比べれば小さい粟粒のような国だと言うてみても、「日本一州ことごとく、浄土の機縁あらわれぬ」（高僧和讃）『聖典』四九八頁）と言ったり、「朝家の御ため、国民のために念仏申せよ」（御消息集（広本））『聖典』五六九頁の意）と言われたならば、太子にささぐと云えそれが国民にささぐるといふことです。日本の国民の人びとに、よそまではあるいは知られなかつたと言えそれが国民にささぐるといふように一切衆生を忘れることはできないといふことはやがて、事実的には日本国民の精神生活というものを思わずにはおれない。そうすれば、その意図がどうの、いや法脈がどうのと言うておる国民に対してこの書を読んでほしいのであるという気持ちがあつたものであると考へていいのであろう。そして私たちも『教行信証』を読む場合におきまして、この思想を日本国民にささげるといふような意味があつてしかるべきでないかと思つてあります。今回は短い話で、かなり気持ちよく話することができまして、たいへんにうれしゅうございました。これで終わります。

（本稿は、一九七一年一〇月一九日の大谷大学における講義『教行信証』の諸問題』を筆録整理したものである。文責編集部）